

# ◆連載

# いま留萌むかし 第 二 画 話

## ● 栖原家と留萌

江戸時代、明治時代を通じて留萌と最も関係の深かった家に栖原家がある。代々角兵衛をなりの留萌の草創期を語る上で欠かせぬ存在である。

報を仕入れて、だんだんと蝦夷地に対する関心が増していった。

五代角兵衛は明和二年（一七六五）に始めて松前福山城

治時代、大正時代、昭和と約百五十年間留萌となんらかの関わりを持ちつづけるのである。

栖原家はその祖先を源義家に発し、紀伊国有田村（現在の和歌山県）の出であるという。初代角兵衛のとき房総（現在の千葉県）で始めて漁業を経営した。二代角兵衛は元禄元年（一六八七）に漁業のかたわら江戸で薪炭問屋を始め、十三年には江戸深川に材木問屋を始めている。この材木を扱ったことから三代角兵衛は宝暦年間（一七五〇年代）に南部大畑（青森県下北）に支店を構え、下北の材木を江戸、大阪に送り、財をなした。南部大畑といえは当時蝦夷地と本州を結ぶ要衝であった。また、大々的に蝦夷地の材木を江戸に送っていた飛騨屋とも親交があったようである。ここで蝦夷地に対する情

下小松前町に支店を設け、蝦夷地で商売を始めた。始めは諸産物を江戸に送り販売していたが、房総での漁業の経験を生かして場所請負人になり、蝦夷地で漁業を営もうと虎視眈眈とその機会を窺っていた。当時の松前藩の規則では、松前の住民でなければ漁業を営むことができなかったため、支店支配人に橋本三郎兵衛を起用し、後、養子とし栖原三郎兵衛として支店を任せた。

文化四年（一八〇七）に西蝦夷地を巡回した田草川伝次郎は「西蝦夷地日記」のなかのように書いている。

六代角兵衛の時念願の場所請負人となった。天明六年（一七八六）天塩、天売、焼尻を請負、翌年留萌、苫前をも請け負った。

この年から長い留萌と栖原家との付き合いが始まったのである。この後江戸時代、明治時代、大正時代、昭和と約百五十年間留萌となんらかの関わりを持ちつづけるのである。

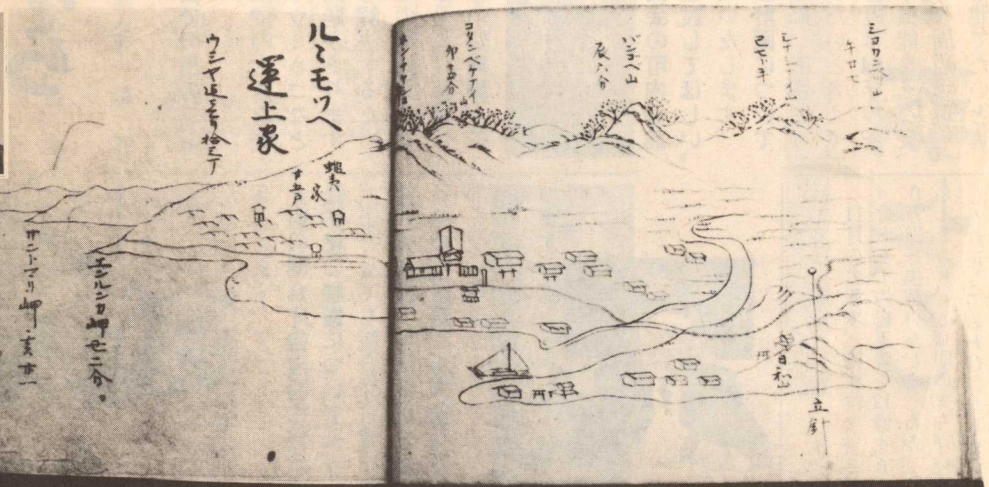
一手場所 請負人 栖原屋半助、支配人兼通詞 文右衛門 支配人 飯役 九郎左衛門、番人 稼方 三五人  
一 運上金 千両也 但秋味 運上金共  
当時のルルモツペ場所はアフシラリからヲタニコ口までであった。運上家はその場所の司法権行政権を一手に握り、場所内のアイヌの人たちを役し、漁業に従事していた。

家の留萌での立場は変わらなかった。栖原の使用人であるアイヌの人たちに関しては年齢なども運上家に聞かなければわからないというほど運上家が絶対の権限をもっていた。

また、出稼ぎの和人に対しても同様の権限をもち、場所内では神様とおなじであった。

明治二年、場所請負人が漁場持と呼称がかわっても、栖原

留萌と栖原家との関係は昭和十年栖原家が撤退するまで続いたのである。



るもい 特集 市政の動き 一・一・一 年

昭和63年12月／発行・留萌市編集・企画・振興・印刷・白鷺印刷株式会社

1988